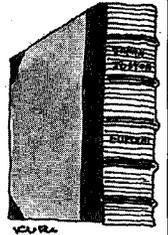


書評



◎ 赤松要——わが体系を乗りこえてゆけ

れを実現するのが望ましいし必要である、と赤松博士は確信した。

この広域経済論はもう一つの主著たる『世界経済論』(国元書房、一九六五年、一三七ページ)に一貫して「雁行形態論」が論ぜられることになって、われわれも雁行形態論とそれ以外の問題を区別する立場を奇しくもとるようになった。

池尾愛子 著

『赤松要——わが体系を乗りこえてゆけ』

小島 清

(一橋大学名誉教授)



1

この評伝「日本の経済思想」十五冊が何をわらうのか。なぜ恩師赤松要博士(一八九五—一九七四)が選ばれたのかも知らないが、とにかく伝記物のベテラン、池尾愛子氏によって優れた好著が発刊されたことはいずれしい。私どもの『雁行型経済発展論・全三巻』(文眞堂、二〇〇三、二〇〇五、二〇〇六年)が、赤松先生の雁行形態論の研究に集中しているのを補充するよう

2

年譜に従い、生い立ちから神戸高商東京高商時代の貧乏学生時代から始められる。第2章「名古屋高商から在外研究へ」では、一九二四年二月から三年余りの在外研究についてその抱負意気込み、夢が述べられ、その成果が第3章で報ぜられる。その成果は、一つのドイツ語論文と『ヘーゲル哲学と経済科学』(同文館、一九二一年、四〇〇ページ)となる。

しかしながら、在外研究の最後に訪れたハーバード大学でのケース・メソッドの見学が、意外なる衝撃と効果を生むことになった。赤松博士は、名古屋高商に産業調査室を開き、これを「第三の窓」と言い、実証研究を推進することになった。これが「雁行形態論」を誕生させることになったのである。思わざる他の喜ばしき成果である。

当時の東京商科大学学長上田貞次郎氏に乞われ、東亜経済研究所を設けるべく一九三九年に転任した。一九二八年五月貴子夫人と結婚された。

中国大陸(中国、満州、朝鮮半島)と南方経済にわたって実態調査が展開された。日本の必要とする石油と鉄鉱石は、中国大陸には少なく、南方諸国及び豪州、アメリカなどとの貿易を描いて外にない。そこで赤松博士は、中国大陸開発論に中心をおくのを排除し、南方との協力論を主張することになった。当時の重大問題である。主要論文を商工行政社『新世界経済年報』第五輯と第九輯に発表。座談会などを通じ博士の立場は明確であった。

一国は必要とする財・サービスをすべて自給自足(アウトアルキー)するのは不可能であるし能率的なことでもない。しかしある程度の広域においてそ

話題はつきない。終戦と南方経済調査の片づけ、アジア民族独立運動の支援、南方からの引き上げ、『世界経済と技術』進歩に関心が移行(小島との共著)。赤松教授の学位問題、教職と公職としての適格審査、東京経済大学学生デモ、戦後の時事問題、インフレ、輸入乗数、長期景気波動問題、国際通貨基金など、など。短文での取り扱いはかえって誤解を招くのでそれは省く。注意したいのは、池尾氏の取り扱いの中心は、われわれが重点を置いた「雁行形態論」以外の赤松博士の学問的、人間的行動の「独自性」、魅力性にある。池尾氏の仕事とわれわれの研究とはうまく分業しており、一体となつて赤松博士の全人格を浮かび上がらせている。良き姉妹編をなしている。

この評伝シリーズが「日本の経済思想」を浮かび上がらせることにあると

すると、われわれの相互補完作業はそれに大きく貢献することになる。雁行形態論については、小島清『雁行型経済発展論・全三巻』を見られたい。日本で創意され、日本初のユニークな理論として世界に問いかけている「経済思想」の一つにほかならない。池尾氏はその側面における「赤松の経済思想」を見事にきめ細かく紹介しているのである。全く良き補完作業と歓迎したい。各所に適切にちりばめられた赤松先生の「うた」もよい。

【著者】 いけお・あいこ 早稲田大学

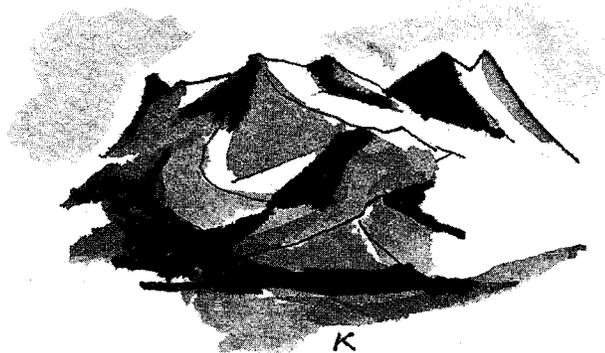
大学院商学術院教授

【発行】 日本経済表評論社 二〇〇八

年二月刊

【判型】 A5判・タテ組、二四〇ページ

【定価】 本体二五〇〇円＋税



K